

News Letter

■2015年6月4日発行 ■編集・発行／三重大学高等教育創造開発センター

授業科目でPBLを導入する教員へ教材開発費・授業開発費を支援する「PBL教育支援プログラム」に、本年度は10件が採択されました。本号では、シリーズ第5回として、北川眞也先生(人文学部)の「PBLセミナー」における実践報告を掲載します。

2014年度開講 「PBL教育支援プログラム: 振り返りの工夫」成果報告 (5)

「 PBLセミナー 」

今回のPBLセミナーは、時事問題に着目するものであった。その目的は、時事問題への注視を通して、現代社会に対する「私たち」のまなざしのあり方を問い直すことであった。それは「私たち」が既存の社会で習得してきた常識的・支配的なまなざしを相対化するということである。さらにそれと同時に、この取り組みの過程で、「私たち」の視野においては周縁化されている、あるいは、そこからこぼれ落ちている人びと、立場・意見の存在に目を向けることができるかどうか、いわばマイナーな見方に接近できるかどうかも目指した。

加えて、上述の目的のために、日本語環境においては接近できない見方・態度を、外国語の新聞記事の読解を通して見出すこともひとつの課題とした。時事問題の内容によっては、国際的なテーマとなる可能性があったという理由もあるが、それよりも、「私たち」とは異なった見方や意見を見つけてほしい、触れてほしいという期待からであった。

したがって、授業の最終的な目的は、時事問題、つまりは社会的な問いに対する受講生自身のまなざしが、セミナーの最初と最後で変化しているのかわ、変化したとすれば、どのように変化したのかを、受講生自身が最終報告において自らの言葉で表現することであった。

セミナーの作業は、グループワークが中心であった。受講生は22名(人文学部18名、医学部2名、工学部2名)であり、5つのグループに分かれて作業を行った。グループ分けは、関心のある時事問題の内容に応じるものであった。取り上げられたテーマは、「SNS・人間関係・いじめ」(4名)、「日本と韓国ならびに中国との関係」(6名)、「改憲と集団的自衛権」(5名)、「教員の入学式の欠席」(3名)、「マレーシア航空行方不明」(4名)であった。

作業は、木曜日3・4限には、それぞれのテーマ

の進行状況ならびに、話し合った内容、現在までの問題点などを、各グループは報告、さらには全体で議論して、問いを共有することを目指した。水曜日9・10限は、グループワークの時間、振り返りの時間とした。ときに、こちらで用意した振り返りのシートへの記入の時間をとり、進行状況を、木曜日の授業とは別のかたちでも把握した。基本的には、水曜日の作業内容を、木曜日に報告するという形式である。

作業の具体的な内容としては、最初に、「私たち」のまなざしを実証的に把握するべく、それぞれの時事問題が日本社会のなかでどのように語られ、理解されているのか。そして、そのテーマについて、どのような議論、立場があるのかを理解することを求めた。資料収集には、三重大学図書館の新聞記事検索(『朝日新聞』と『東京・中日新聞』)を用いた。ただ各自が興味深いと感じた記事をランダムにピックアップするのみならず、まずは、キーワードを入れて検索した結果、表示されたすべての新聞記事の「タイトル」と「日付」からなる表を作成するよう提案した。テーマによっては最近の記事が中心となるグループもあれば、より歴史的な記事を収集・検討するグループもあった。各グループとも、表のなかの記事タイトルからだけでも、どのような議論や立場があるのか、大雑把ではあるが、ある程度把握することができていた。

このように「私たち」のまなざしを、時間をかけて、また議論しながら調べていった結果、受講生からは、自分自身のまなざしが、「私たち」の枠組みを外れるものではないことをはっきりと自覚できたという意見、自分のものと思っている意見が社会的かつメディアによって方向づけられているなどの意見が出された。この作業は、「私たち」のまなざしを相対化するひとつの契機となりえたとと言えるのかもしれない。



続いて、外国においてその時事問題がどのように報道されているのかを知るべく、外国語の新聞記事の収集、読解に取り組んでもらった。外国語の新聞社のホームページにおいて、キーワードを入れて検索を行い、記事数が多ければ(マレーシア航空行方不明)、日本語の新聞のととき同様の作業を行うよう求めた。記事が少なければ、いくつかをピックアップするよう求めた。テーマの内容にそって、New York Times紙(アメリカ)、Guardian紙(イギリス)、Bernama紙(マレーシア)、東亜日報(韓国)、ハンギョレ紙(韓国)、China Daily紙(中国)などを提示した。いずれも英語あるいは日本語の記事がある新聞社のサイトであった。

英語の読解ということで、受講生は記事の収集・読解に苦労している感もあったが、最終的には想像以上の成果をみせてくれた。特に、「マレーシア航空行方不明」をテーマとしたグループは、果敢にマレーシアの新聞の読解に挑戦し、日本の新聞報道と比較することで、問題へのまなざし、論点の違いを浮き彫りにしていた。

その他、各グループは、テーマにそったウェブ上の記事や書誌などを適宜参照していた。その際、参照した記事を掲載しているホームページがどのような社会的・政治的立場であるか明示するよう求めた。

授業では、各グループの成果を問う機会として、毎回の報告とは別に、中間発表と最終発表を設けた。これらをもっとも体系的な発表の機会とした。中間発表は、それまでに収集・分析している新聞記事の紹介を中心に、「私たち」のまなざしの内容について報告してもらった。中間発表の後には、配布資料というかたちで、教員からのコメント、アイデアを各グループに示した。各グループはそれを受けて、作業内容、作業目的をより明確にし、最終発表へと向かっていった。最終発表は、テーマの社会的意義、新聞記事の全体的傾向、具体的に紹介する記事の選定、全体の構成や論理、結論、さらには図表の作成も整えた上で、パワーポイントを用いて、各グループ45分(質疑含めて)の報告であった。中間発表、最終発表ともに、受講生から積極的かつ有益な質問や意見が数多くなされた。

最終報告の結果、受講生の時事問題に対するまなざしはどのように変化したのか。以下、受講生のコメントのいくつかを挙げておく「当初は、教師の入学式欠席などあり得ないと考えていたけど、働くという視点になじんでからは、今はそこまではっきりとは言えないようになっている」、「改憲について反対、賛成とはなんとなく示せるけど、いろいろ調べても、そ

れがどう自分たちの日常生活への結びつくのかという観点が希薄であった」、「日本と韓国・中国の関係は、普段私たちが触れているメディアの影響が大きいように感じた」、「マレーシア航空機の話は、何かミステリーのようにおもしろおかしく語られ、真相が不明なまま報道されなくなったけど、それによって苦しんでいる人びとがいることが忘れられてしまう。この出来事はもう解決した、存在しないかのように」、「SNSは便利なツールと思っていたが、ここまで逃れられないとは。人間がスマホそのものになっているのではないか」。

このような意見をふまえると、「私たち」のまなざしを相対化するという目的は、ある程度は達成できたのではないかと推測する。教員は、基本的には作業の枠組みのみを提示したのみであるが、受講生の真摯な取り組みの結果によるところが大きいと感じる。また本セミナーの進行・運営では、3年生の学生にTAのごとく様々な面で援助してもらったが、かれの存在もまた重要であった。ほぼ同い年の学生が、グループワークや発表に対して、積極的にコメント、アドバイスする姿は、受講生には大いに刺激となったであろうし、全体の議論や質疑が活発となった一助であったと考える。

最後に、課題あるいは検討事項として、2点ほど挙げておきたい。ひとつは、自身のまなざしを相対化した「その次」のことである。今回のセミナーでは、マイナーな見方を見出すことも目的であったが、それをなかなか具体的に探求する、提示するということまではたどり着くことができなかった。授業で提示する資料として、大手の新聞社の新聞のみならず、周縁化されている人びとの発信しているメディア(それがあれば)の収集・読解・分析もまた含めるべきではないかと感じた。

もうひとつは、グループワークについてである。時事問題という点で、対象とするテーマによっては、グループ内で個々の意見の相違が見出されることを予測していた。それは、異なった意見に触れる、あるいは衝突するときに、どのような行動をとるか、意見を述べるか、さらにはその上で、いかにグループワーク、いわば社会的な作業をすすめられるかを問うということでもあった。作業や話し合いが停滞するときには、グループワークに教員自身が参加することで、その状況を改善するきっかけを与えるようにした。過度な衝突に至るグループは今回はなかったが、社会的背景も様々な学生が集まっている以上、対応あるいは方向づけが必要となるときもあると感じた。(北川真也)